

教室のようす

—子どもの身のまわりと先生—

1. 教室……P.14
2. 子ども……P.17
3. 先生……P.19

日本の平均的な小中学生は、20分ほどかけて登校し、7時間半あまりを学校で過ごし、20分ほどかけて下校する。(図1) 小中学生は1日の1/3、起きている時間の約半分を学校で過ごしており、そのほとんどが教室にいる時間である。

小中学生が1日のうちのかなりの時間を過ごす教室とはどのような場所なのだろうか。教室ではどのような級友とともに生活を送っているのだろうか。そして、どのような先生のもとで学習に取り組んでいるのだろうか。様々なデータから紐解いてみたい。

図1. 10～14歳児の行動の種類別、総平均時間(平日)(平成28年)



(注) まるめのために合計が24:00にならない。

資料：総務省統計局「平成28年社会生活基本調査」を基に作成

1 教室

1-1 教室の広さ

奥行7m、間口9m、面積63m²、そして天井高が3m、これが一般的な教室の大きさである。このような空間で、最大40人が一緒に学校生活を送っている。

教室の大きさはどのように決められてきたのか。これは130年あまり前にまで遡る。教室の大きさの基準を初めて示したのは、1882(明治15)年の「文部省示諭」である(文部省、1882)。ここでは、教場に入るべき児童数はおよそ60人を最多数とすること、教場の面積は児童1人につき3尺平方(約0.9m²)とすること、天井の高さは1丈(約3m)以上とすることとされている。仮に教室に60人の児童を収容する場合には、1教室の面積は約55m²程度となる。

1895(明治28)年には「学校建築図説明及設計大要」(文部大臣官房会計課、1895)によって、1教室あたり児童数による教室の大きさの基準が示された。36～42人の場合奥行3間×間口3間半、48人以内(3間×4間)、54人以内(3間×4間半)、56人以内(3間半×4間)、60人以内(3間×5間)、72人以内(3間半×4間半または4間×4間半)、80人以内(4間×5間または3間半×5間)とされ、児童1人当たり面積は約0.8m²～約0.9m²であった。(表1)

戦後の1950(昭和25)年には、文部省が日本建築学会に校舎の標準設計案の策定を委託し、「鋼筋コンクリート造校舎建築工事」という規準が作られた(日本建築学会、1950)。この規準における教室の大きさは、「学校建築図説明及設計大要」に示された80人以内の場合の奥行4間×間口5間を踏襲し、奥行7m、間口9m(面積63m²)とされた。これ以後建築された学校の多くはこの規準に沿って教室が設計された。ただし、1学級当たりの人数が著しく少ない学校では、これよりも小さな教室も造られている。

教室における1人当たり面積の変遷を見ると、最近の方が広くなっていることが分かる。戦後的小中学校の学級編制の基準は、1959年に1学級当たり児童生徒数50人以下、1964年に45人以下、1980年に40人以下、2011年に小学校第1学年に限って35人以下と引き下げられてきた。収容人員別学級数の統計のある最も古い学校基本調査のデータである1956(昭和31)年の結果を見ると、小中学校ともに単式学級の1/3以上が50人を超える学級であったことが分かる。(図2)

表1. 教室の1人当たり面積と天井の高さの推移

区分	1人当たり面積	天井の高さ
1882年	約0.8m ² 以上	約3m以上
1895年	約0.8m ² ～約0.9m ²	約2.7m以上
1950年		3m以上
2005年		2.1m以上